

第4回 ARG WI2 研究会 学生報告

平成 26 年 5 月 24 日、25 日

1. はじめに

平成 26 年 5 月 24 日（土）、25 日（日）に、隠岐開発総合センター 島民ホールにて第 4 回 ARG WI2 研究会が開催された。参加者は一般 26 名、学生 15 名の合計 41 名であり、両日とも活気ある発表や意見交換が行われた。

2. 一般発表

一日目は、社会の課題解決における Web 技術利用のセッションが行われた。二日目は、情報構造化、マイクロブログ利活用、ソーシャルネットワーク分析、エンタテイメントと想像支援、意思決定支援の 5 つのセッションが行われた。これら合計 6 つのセッションの中で、特に興味深かったものを紹介する。

藤本氏らの「オントロジーを利用した Web 画像サイトからの階層的画像データセット生成」では、意味的に階層構造化された画像データセットを Flickr から自動生成する手法が提案された。一般物体認識の実現に用いる学習用の画像データセットを人手で作成するには多大な人的・時間的コストがかかる。そこで、Flickr の画像タグの持つ意味的な情報をオントロジー辞書に照合し、“犬”や“猫”、その上位概念である“動物”といった概念構造上に配置することで、画像データセットの階層構造化を行う。提案された手法に、コンピュータによる一般物体認識の精度向上に大きく貢献する可能性を感じた。

鳥海氏らの「人工知能」の表紙に関するツイートの分析・続報」では、人工知能学会誌「人工知能」2014 年 1 月号の表紙について Twitter のツイート内に存在する URL 情

報の分析を行い、「外部からの情報」がどのように流入し、情報の種類によって広がり方がどのように変わるのかについて発表が行われた。インターネット上での話題の持続や拡散の仕方についていくつかのパターンが見られたことから、今後どのような内容がいわゆる「炎上」につながるのか予測することも可能になるのではないかと考えた。また、ツイートに関する内容とあって、WI2 研究会のハッシュタグが付けられた Twitter のタイムライン上でも活発な意見交換が行われていたことが非常に印象的だった。

片岡氏らの「意思決定を要する会議における貢献度推定技術」では、電話会議中の参加者の貢献度を推定するため、貢献行動を 5 つに分類し、それらの貢献に関する行動意図に基づく行動をデータとして抽出可能なサービス機能を持つシステムを構築した上で、そのシステムが貢献度の推定が可能かどうかについて発表が行われた。参加者の貢献度を考慮しながらファシリテータのように会議をより良い方向に導くシステムの開発を予定されているそうであり、今後の展開に期待したい。また、研究の進め方についてもサービス機能の検討から分析までとても丁寧に行われており、大変参考になった。



図 1: 一般発表の様子。

3. ショートエクスカーション

一日目のセッション終了後、懇親会までの時間にショートエクスカーションが行われた。ショートエクスカーションではバスで移動しながら島内の環境や生活について説明を聴き、隠岐神社、明屋海岸などの名所を訪れた。海士町の豊かな自然と歴史に触れ、海士町の魅力を体感することができた。



図 2: 明屋海岸で撮影した集合写真.

4. 招待講演

海士町中央図書館 磯谷奈緒子氏、隠岐國学習センター 大辻雄介氏、株式会社巡の環 石坂達氏から、海士町において IT 技術がどのように使われているかの事例が紹介された。

磯谷奈緒子氏は海士町中央図書館におけるクラウドファンディングへの取り組みについて講演された。中ノ島全体を一つの図書館とする「島まるごと図書館構想」について紹介され、離島におけるクラウドファンディングの一例を示した。

大辻雄介氏は海士町における映像講義について講演された。映像講義のメリットについて解説し、離島地域の教育における課題の克服に取り組んでいる。ICT を使うことが目的ではなく、ICT を使って何かを達成することが大切という発言が印象的だった。

た。

石坂達氏は巡の環の活動である地域づくり事業、メディア事業、教育事業について講演された。その中でも、海士 Web デパート、Skype による地域コーディネーター養成講座、あまだねくらぶなどの取り組みのご紹介をされた。

それぞれ、IT 技術を有効に利用して島内外をつなぎ、海士町の発展や島外との交流に役立てる事例を示して頂いた。僻地における IT 技術の利用の現状や今後の応用可能性について知ることができ、大変勉強になった。

5. 懇親会

一日目の夕方に、菱浦港にてバーベキューを行いながらの懇親会が行われた。海士町の新鮮な海の幸や隠岐牛を味わいながら交流が行われた。また、海士町の民謡キンチャモニャ踊りの体験も行われ、大いに盛り上がった。



図 3: 懇親会でのキンチャモニャ踊りの様子.

6. おわりに

二日間にわたる研究会は様々な研究分野の発表を聴くことができ、また、自分の発表においても様々な意見をいただき、今後の研究を発展させることができる機会となった。

三宅 貴太郎
(岡山大学)